《論　文》

ブリヤート人歴史家の歴史記述
― モンゴルとロシアの描写を中心に ―[1]

井　上　　治

はじめに
１．『ホリ・アガ・ブリヤート史』（TT）の基本情報
２．モンゴルとの関係
３．ロシアとの関係
おわりに

はじめに

日本におけるモンゴル文年代記研究の第一人者森川哲雄［435］はブリヤートでも多くの年代記が作られたことを指摘した。

ブリヤート人は、ロシア連邦内ではブリヤート共和国中心に、イルクーツク州に合併されたウスチオルダ・ブリヤート自治管区やチタ州に合併されたアガ・ブリヤート自治管区などに居住し、モンゴル国の北部、中国内モンゴル自治区のハイラル近辺にも居住しており、チンギス・ハーンの頃にはすでにバイカル湖周辺に住んでいた。ロシア人の進出した17世紀当時、ブリヤート人の主たる部族に何を数え上げるかには諸説あるが、筆者が参照した諸研究によれば、レナ川地方に住むエヒレド（bur. Эхирэд）、アンガラ川地方に住むボラガド（bur. Булагад）、モンゴルよりザバイカルに移り住んだホリ（bur. Хори）という三大部族に、セレンゲ（bur. Сэлэнгэ）と呼ばれる氏族集団をブリヤート人の構成に加える。セレンゲは、1688年に始まったハルハ・オイラド戦争の折にモンゴルからモンゴルとの西南境一帯に移り住んだホンゴードル（bur. Хонгоодор）、同様にセレンゲ川水系中・下流域に移り住んだサルトール（bur. Сартуул）やソンゴール（bur. Сонгоол）など諸氏族

1　本稿は、タタールスタン共和国科学アカデミー歴史研究所・島根県立大学北東アジア地域研究センター共催国際会議（2016年８月６日カザン）での報告「近代モンゴル史書の記述の前提：ブリヤート人歴史家はロシアとの出会いをどのように描いたか」を修正したものである。これの転載を許可された同研究所のマラト・ギバトディノフ氏とラリサ・ウスマノヴァ氏に深甚の謝意を表する。

からなる。これらは17世紀末から18世紀にかけてロシア帝国に編入された。バイカル湖以西に住むエヒレドとボラガドは早くから当地の民族と混交し、ロシア人に比較的早く征服されたためにロシアの影響を強く受け、農業に従事する者が多く、元来はシャマニズムを、ロシアの影響が強まって以降はキリスト教を信仰する者が現れた。一方、バイカル湖以東に住むホリとセレンゲは、モンゴルとりわけハルハ部と深い文化的・政治的関係を有したため、遊牧を主たる生業とし宗教はモンゴルから伝来したチベット仏教が盛行し、ハルハ部の王公に貢納した時期もあった［Кудрявцев: 4-8, 27-28, 144-165; Цыдендамбаев: 134-213; Оюунтунгалаг: 11-31; ИБ1: 253-285］。ホリは今日のブリヤート族の主要な構成員となり［吉田：47］、セレンゲ諸氏族はブリヤート仏教の中心を担った［若松1980］。

ブリヤート人がブリヤート語で書いた年代記・歴史書（以下、ブリヤート史書と略す）を扱った研究や紹介は主に旧ソ連、ロシア、ブリヤート共和国などに存在する。筆者はそれら既存の研究を十分に収集していないが、ヴァンダン・ユムスノフVangdan Yümčüng-ün[2]著の『ホリ11氏族の民の起源の歴史』*Qori-yin arban nigen ečige-yin ǰon-u uγ iǰaγur-un tuγuǰi*（1875年著）［Хори1: 53-172］に関するバドマエヴァの専著［Бадмаева 2007］と、ダムビジャルツァン・ロムボツェレノフDambai ǰilčin Lombu čereng-ün[3]が1868年に著わしたセレンゲ・ブリヤートの歴史『モンゴル・ブリヤートの歴史』*Mongγul buriyad-un teüke*（1868年著）［Селенге］に関するシャグダロフとバドマエヴァの専著［Шагдаров, Бадмаева 2014］、広くブリヤート史書群のブリヤート語テキストを言語学的に分析したバドマエヴァの専著［Бадмаева 2005］を精査すると、これら二つの史書よりも古く1863年に成ったテグルドゥル・トバインTegüldür Toba-yin[4]（以下、テグルドゥルと略す）著になるホリとアガのブリヤートに関する史書『ホリとアガ[5]のブリヤートたちのかつて起こったこと』*Qori kiged aγuyin buriyad nar-un urida-daγan boluγsan anu*（以降、TTあるいは『ホリ・アガ・ブリヤート史』と略す）の専論は未だ現れていないようである。TT執筆時に参照されたワンシグ・サーギンVangsig Sa_a_gi-yinの史書（1845年著）［TT : 46-47］[6]など、TTより古くに成った史書もあるが、そのオリジナルが未刊である現在、TTは、ブリヤートの主たる構成員であるホリとそれから分かれたアガの歴史を記した史書であり、成書年代が明確かつ古層に属するブリヤート史書として重要である[7]。

2　Вандан Юмсунов

3　Дамбижалцан Ломбоцэрэнов

4　現代ブリヤート語Түгэлдэр Тобын、ロシア語Тугултур Тобоев。

5　アガのブリヤートとは、18世紀末にホリから分かれて、バイカル湖の南東方、オノン川下流部左岸に移動した一群のこと。

6　ワンシグ・サーギンの史書と思われるアヨーシャ・サーギエフАюуша Саагиев著の史書の現代ブリヤート語訳が公刊されているが［БТБ2: 5-13］、原本のモンゴル文字テキストは未刊のようである。

7　ブリヤート語は1939年にキリル文字で表記される以前、ワギンダラ文字やラテン文字表記の少数例を除き、モンゴル文字で表記された。管見の限りでは、モンゴル文字表記ブリヤート史書の原書

本稿は、TTの作者であるブリヤート人テグルドゥルが、モンゴル人との関係から何を書きとめ、ホリとアガのブリヤート人をモンゴル人とのどのような関係に置いているか、また、ロシア国家やロシア人との接触のどの局面を取り上げて、自らの歴史的立場を説明しているかに着目したい。これを探求することによって、ブリヤートの主要な構成員であるホリとアガのブリヤートを扱った史書であり、しかも現存するうちでは古層に属する史書において、彼ら自身と極めて深い関係にあるモンゴルとロシアとの関係をいかに定置しているかを明らかにし、ブリヤート人が自ら記す歴史の本筋の一つを示すことができるであろう。この着目点に関係する記述はTTの前半部［TT: 5-25］に集中しているので、本稿ではその部分を取り扱う。

1.『ホリ・アガ・ブリヤート史』（TT）の基本情報

本稿で用いるTTのテキストはХори1所収の活字本であり、旧ソ連科学アカデミー東洋学研究所蔵（現、ロシア科学アカデミー東洋文献研究所）のジャムツァラーノ収集コレクションに収められるC366写本*Qori kiged aγuγin buriyad nar-un urida-daγan boluγsan anu*を底本とし、F6写本とF87写本を用いて校訂したテキストである［Хори1: 4; Пучковский: 97-101; Сазыкин: 121-122］。このTTには、ポッペによるロシア語訳がБЛ［5-35］に、現代ブリヤート語訳がБТБ1［12-33］にそれぞれある。しかし、双方ともに原テキストを完全に訳出せずに省略したり、訳者の理解に即して語順を入れ替えたりするなどの操作がなされていて、本稿で扱う部分にもそれが見られる。本稿では、原テキストからの翻訳を心掛け、文意が取りがたい場合など必要な場合に限ってロシア語訳や現代ブリヤート語訳を参照しその差異を注記することとする。

紙幅の都合から、ブリヤート史書の概観は行わないが、歴史資料としてのブリヤート史料を概説したルミャンツェフがまとめたTTの主な内容を下に掲げておく［Румянцев 1960: 10］。

1）ホリ・ブリヤート人のホリドイ・メルゲンХоридой-мэргэнに関する民間口頭伝承。

2）ホリ・ブリヤート人の東モンゴルへの移動に関する記述。この部分には、バリジン・ハトゥンБальжин-хатунの説話が手短に書かれてある。

4）ロシア国家の一部となった十七世紀末から十八世紀初めの、ホリ・ブリヤートのノヤンの歴史、彼らの活動と功績、勤務に関する記述。

5）ホリ・ブリヤートのタイシャ（ブリヤート諸部族の統治者の呼称― 筆者）たちによる支配、彼らの職権乱用、強要、横領、庶民への圧迫と暴力に関する記述。

影は未刊行であり、すべて活字版で刊行されているようである。BTS所収の九種類の史書のモンゴル文字表記テキストはその原本・底本が未詳、Rinchen刊の二種類はローマ字転写テキストであり、БТБ1とБТБ2は現代ブリヤート語訳であるため、研究には使いづらい。

6）農業と草刈りなどの開始、商店の設立、天然痘の流行と種痘の開始など、経済的な情報を含む記述。

7）ホリ・ブリヤート人のシャマンの儀式に関するユニークな記述。

8）他のホリ・ブリヤートの史書同様の、チベット仏教の普及の歴史、寺院の建設、僧侶と布教僧の伝記。

9）TT執筆に用いた史料名。

次に、TTのコロフォン［46-47］を確認しておく。以下、TTのモンゴル文字表記ブリヤート語テキストやそれにもとづく和訳を示すが、ブリヤートの人名、氏・部族名、官職名のカナ書きにあたっては原則としてモンゴル語読みに、地名や地理的事物名はロシア語読みが定着しているのでロシア語読みにし、現代ブリヤート語の発音との間に違いがある場合、注記やカッコ内にブリヤート語を表記する。なお【 】内は筆者による補訳である。

> ホリとアガのブリヤートたちが初めに如何なる理由でどのように生じたか、【その】間にどこに住牧しどのような暮らしを送ったか、勝者の教えがどのように現れて広まったか、最後にどのようになっていたかなどの簡単にまとめた歴史、これを今ある人が知るために、将来後代の人たちが忘れないためになるだろうと、アガのブリヤートたちの筆頭タイシャaqalaγči tayiša、14等文官qollisqoi registarator[8]にして受勲者kavaliir[9]であるテグルドゥル・トバインTegülder Toba-yin（トゥゲルデル・トブィンТүгэлдэр Тобын）、別名ゴンボジャブmGonbosgyabsと言われる者が、ホリのブリヤートたちのラマと僧たちの筆頭チョルジaqalaγči čorzi・ツェウェングČeveng-ü（ツォヴァーナイЦуваанай）が1843年に編んだ書と、ホリの医師ワンシグ・サーギンVangsig Sa_a_gi-yin（ヴァンチグ・サーグィンВанчиг Саагын）が1845年に編んだ諸書を中心にし、前代のある人が書いたあれこれの書と確認して突き合わせ、その足りないところをホリとアガの草原会議の諸事から拾い出し、またロシアで1815年以来自ら見聞きしたことと合わせて完全にして、第十四ラプチュンの中のdoγsin（猛厲）といわれる庚申（1860）年より編み始めたが、終わらせるべきその終端を、わが仏陀がルンビニの花園で生まれてより2823番目の年である癸亥（1863）年の甲寅月の第十番目の戊午の日に、ロシアの1863年のフェヴラリfibrali[10]月（２月）の第十六番目の日に書き終え、確認などを終えた。

とある。これによると、TTは、ホリとアガのブリヤートの起源、住地と生活の経過、仏教の伝播、直近の状況を簡潔にまとめたものだという。著者名とその官職、執筆に用いた資料、成書年月日[11]も見えている。

8　коллежский регистратор

9　кавалер

10　февраль

11　テグルドゥルの記す成書年月日には混乱がある。ブリヤート語原文はusun em_e γaqai ǰil-ün modun

テグルドゥルの経歴や人物像、著作に関する専論は未発見であるが、ブリヤート史書の解題や概論の中で触れられており［Цыдендамбаев: 49, 51; БТБ1: 32-33; Бадмаева 2005: 12-15］[12]、ポッペやルミャンツェフは、テグルドゥルはツァーリの統治を支持する他の年代記作家と同じように、1859年から1878年にかけてアガ・ブリヤートの筆頭タイシャ aqalaγči tayiša[13]という民族最高の地位にあった封建的上層であり、ツァーリの政治を忠実に支持してツァーリの植民主義者的政治家に反対せずにその政治を先導した者であり、年代記では忠良な臣民の意識を保持する者だった、とする。またTTは、内容とスタイルの点で最良の一つであり、テグルドゥルはザバイカルのノヤンの中では教養と知識の点で抜きん出て優れ、モンゴルの年代記や主要なロシアの歴史文学に精通した人物であった、とする［Хори1: VII-IX; Румянцев 1960: 9-10］。

２．モンゴルとの関係

以下、TTの記述の順を追って内容を分析する。本稿で取り扱うTT前半部の内容を概観すると、「ホリ十一氏族」が起こって「ブリヤート」と称するに至る過程を描く前半部と、ロシア国家に属することになった「ホリ・ブリヤート」の経験を記す後半部とに分けられる。この２では、その前半部を考察する。

２－１．モンゴルから分かれてロシアに入る

テグルドゥルは冒頭で、『ホリとアガのブリヤートたちのかつて起こったこと』というタイトルに続けて、

> 大いに尊い大清国Dayičing ulusのボグド・ハーンBoγda qaγan管下のモンゴル人から分かれ、ロシアOrusの地を自らの御手に掌握する大いに尊いエジェン・ハーンeǰen

---

baras sar_a-yin arbaduγar er_e sirui morin edürとある。この日は旧暦にして訳すと「癸亥年の甲寅月の第十番目の戊午の日」なのだが、旧暦の癸亥年甲寅月十日は「戊午」ではなく「丁巳」にあたり、十一日が「戊午」にあたる。テグルドゥルはこの日をロシアの暦に置換して1863 on-u fibrali sar_a-yin arban ǰirγuduγar edür（1863年フェヴラリ〔２〕月16日）とする。旧暦「十日の丁巳」はユリウス暦で1863年２月15日、グレゴリオ暦で1863年２月27日にあたり、旧暦「十一日の戊午」はユリウス暦で1863年２月16日、グレゴリオ暦で1863年２月28日にあたり、旧暦「十一日の戊午」・ユリウス暦1863年２月16日がテグルドゥル記載のロシアの暦の日に一致している。以上から、arbaduγar（第十番目）は誤りで「第十一番目」を意味するブリヤート語であるべきものと推測される。なお、БТБ1［32］では現代ブリヤート語でарбадахи эрэ могой үдэр（第十の男の巳の日）と訳し「十日の丁巳」を採るが、丁は火性の陰であり、陰陽を表すブリヤート語はここではэрэ（男＝陽）ではなくэмэ（女＝陰）が正しい。

12　ルミャンツェフはブリヤート史書群を概説し［Румянцев 1960］、ブリヤート史書群をホリ・ブリヤートの起源を分析するための資料として用いた［Румянцев 1962: 71-72, 81-82, 175-191, 223-234］。ツィデンダムバエフはブリヤート史書記載のブリヤート各氏族の起源とその史書の言語を分析する前提として、各史書の版本や全体の内容を解説した［Цыдендамбаев: 40-133］。

13　главный тайша

qaγanの管下に入った。［TT: 5］

と記し、ホリとアガのブリヤートは、清朝皇帝の管下にあったモンゴル人から分かれて、ロシアの君主の管下に入った人々であるとする。ここから、ホリとアガのブリヤート人はもとはモンゴル人であるという含意と、モンゴル人から分かれたロシアの属民として別の存在であるという含意が読み取れる。

ブリヤート語の動詞表現に目を配ると、ブリヤート語でエジェン・ハーンと表記されるロシアの君主との関係の端緒は、エジェン・ハーンの管下に「入った」oruγsanことであり、征服されたことを意味する語や「入った」の受け身を意味する形は書かれていない。つまり、テキストの上では、ブリヤート側からの自発的なロシアへの接近を読み取ることは不可能ではない。

２－２．ホリ十一氏族の起源

本稿で「ホリ・ブリヤート」と呼ぶ人々は、TTでは、この項で扱う記述の後の時代になって「ブリヤート」を称したとされているので、この項では、暫時、「ホリ」あるいは「ホリ十一氏族」と表記しておく。

テグルドゥルによると、ホリ十一氏族は次のようにして発生した。モンゴルのホリ・トゥメドQori tümed[14]のバルグ・バートル・ダイチン・ノヤンBarγu baγatur dayičing noyan（バルガ・バータル・ダイチン・ノヨンБарга баатар дайчин ноён）には長男ホリダイ・メルゲンQoridai mergen（ホリドイ・メルゲンХоридой мэргэн）があった。その妻の一番目はバルグジン・ゴアBarγuǰing γuu_a（バルガジャン・ゴアБаргажан гуа）といい、二人の間には一人娘のアロン・ゴアAlung γuu_a（アラン・ゴアАлан гуа）が、二番目の妻のシラルダイSiraldai（シャラルダイШаралдай）からはガルゾドGalǰud（ガルゾードГалзууд）、ホワツァイQuvačai（ホアサイХуасай）、フブグドKöbgüd（フブドゥードХүбдүүд）、ゴチドGučid（ゴシャドГушад）、シャライドŠarayidという五人の息子が、三番目の妻のナガタイNaγataiからはハルガナQarγan_a、ホダイQudai、ボドンゴドBodungγud（ボドンゴードБодонгууд）、ハルビンQalbin（ハリバンХальбан）、チャガンČaγan（サガーンСагаан）、バトナイBatunai（バタナイБатанай）の六人の息子が生まれた。この十一人の息子が十一の氏族になり、父親の名ホリダイのホリをとって十一氏族の総称とした［TT: 5］。

これら人物のうち、ホリ・トゥメドのホリダイ・メルゲン、その妻のバルグジン・ゴアと一人娘のアロン・ゴアは、『秘史』第八節から第十節に同一あるいは類似の名前が見える。バイカル湖東岸のバルグジン川河口一帯を指すコル・バルグジン河谷の主のバルグダイ・メルゲンの娘バルグジン・コアの嫁いだ相手がコリ・トマトの族長コリラルタイ・メ

14　原文はmongγul-un qoyar tümed「モンゴルの二つのトゥメド」。現代ブリヤート語訳は下線部をмонголой хори түмэд「モンゴルのホリ・トゥメド」とする［БТБ1 : 12］。

ルゲンである。この二人の間に生まれた娘がアラン・コアである。アラン・コアはボルテ・チノの直系子孫ドブン・メルゲンに嫁ぎ、ドブン・メルゲンの死後、日月の精との間にボドンチャル・ムンカクを産み、この子孫にチンギス・ハンが現れる。

しかし、TTはボルテ・チノにも、ホリダイ・メルゲンの第一婦人アロン・ゴアの子孫にも言及しないので、チンギスも当然登場しない。その代わりに第二、第三婦人からホリ十一氏族が生じたことを記し、ホリ十一氏族に関係のない系譜情報は、ボルテ・チノもチンギスも含め一切略して、ボルテ・チノやチンギスに連なるモンゴルの権威的系統とは一線を画すホリ十一氏族の系譜を示しているのである。

２－３．ホリ人の移動

つぎにテグルドゥルは、モンゴルのトゥメド部のアルタン・ハーンAltan qaγanがダライラマ・ソナムギャムツォSodnam ǰimčo Dalai blam_aを1578年にモンゴルに招いて、モンゴル人の間に仏教が広まったことを記す［TT: 5-6］。ここにアルタンの仏教事業を記すことは、後にブリヤートに伝播する仏教が［TT: 21］、先行してモンゴルに広まっていたことを示し、仏教を介した文化的相互関係が作られる前提を説明しているかのようであるが、もう一つ別の理由も見いだせる。アルタンの仏教弘通事業を記した最後の部分は、

> （前略）第十ラプチュンの第十二年の戊寅年（1578年）（中略）仏教を広め十善法の禁令を起こし立てるその時あたりから、バルグ・モンゴルBarγu mongγul（バルガ・モンゴルБарга монгол）の地のソロンゴドSolungγud（ソローンゴードсолоонгууд）のブーベイ・バートル・ベイレ・ハーンBüübei baγatur beyile qaγanの息子のダイ・ホンタイジDai qung tayiǰiにバルジン・ハトンBalǰin qatun（バルジャン・ハタンБалжан хатан）[15]という嫁を降す時に、（後略）[16]［TT: 5-6］

となっている。テグルドゥルは、下線部のように、1578年のモンゴルでの仏教弘通を記した後に、二重下線部のように、ブーベイ・バートル・ベイレ・ハーンに始まる物語を接続している。実はこの物語は、下にまとめるホリ十一氏族の移動の端緒となっているので、1578年の出来事は、移動の開始時期を示す機能を果たしていると見ることができる。

TTの記すその移動を簡単にまとめる。ホリ十一氏族はバルグ・モンゴルの地のソロンゴド人のブーベイ・バートル・ベイレ・ハーンの息子ダイ・ホンタイジの妻バルジン・ハトンに与えられ、ダイ・ホンタイジの属民になった。ダイ・ホンタイジは、バルジン・ハトンがブーベイ・バートル・ベイレ・ハーンの妻と不仲になったため、妻とホリ十一氏族を連れて1594年に父の所を逃れ出たが、父ハーンやツングース系ハムニガン人やモンゴ

15　185頁に示した、ルミャンツェフによるTTの内容２）の「バリジン・ハトゥンБальжин-хатун」。

16　ブリヤート語原文の翻訳にあたり、原文中にブリヤート語で数が書かれている場合には漢数字を用い、チベット数字が使われている場合には算用数字をもって翻訳した。

ル人の攻撃によって、ホリ十一氏族の者は離合と移動を繰り返しバイカル湖一帯に移った。そこには先住のブリヤートと称する人々がいたのでそれをまね、ロシアの人々が名付けたように「ホリの十一氏族のブリヤートQori-yin arban nigen otuγ-un buriyad」と称するようになった［TT: 6-9］。

ホリ十一氏族がバイカル湖一帯に移ったのは、モンゴルの地のソロンゴド人、ツングース系民族、モンゴル人の襲撃とそれからの逃避に因った。ここにも「モンゴル（あるいはモンゴルの地の者）からの分離」という動因が見えている。また、移動を繰り返した末に到達したバイカル湖に先住するブリヤート人の名称を取り、ロシア人による呼称にならって、「ホリの十一氏族のブリヤート」というようになった、つまり、ホリ十一氏族がモンゴルから分離して移動した結果として「ブリヤート」になったことが含意されている。

２－４．モンゴルとの距離

ここまで取り上げた記述に共通する特徴を一言でいうならば、ホリ十一氏族ならびにホリ・ブリヤートとモンゴルとの間に一定の距離を置こうとする姿勢であろう。

冒頭から、ホリとアガのブリヤートは清朝治下のモンゴルから分かれてロシアの君主の下に入って行ったと明言し、系譜の上ではボルテ・チノともチンギスとも結びつかないホリ十一氏族の起源論にこれら両者を組み込まず、バルグ・モンゴルの地のソロンゴド人のハーンなどから逃れる移動の過程で「ブリヤート」の一部となったことをバルジン・ハトンの伝説を利用して描き出している。

テグルドゥルは、ホリ十一氏族が「ブリヤート」の一部となる過程の説明において、「モンゴルから離れた」存在であることを繰り返し提起している。しかし、ブリヤート人を自らの貢納民とみなす南隣のハルハ王公が、ロシアの支配に入って貢納しなくなったブリヤート人をめぐってロシア側に抗議の使者を派遣するなどの事実があったことからもわかるように［宮脇：119-123, 128; 吉田：114-344］、ホリやセレンゲのブリヤート人がその南に居るモンゴル人とのつながりを断ち切れたはずはなかった。このことは、下の３－３や３－11に見るように、テグルドゥル自身が、ブリヤートとモンゴルを画するという意味を含んだ露清国境画定やモンゴルからの仏教の伝播の事実などの出来事に言及していることからも明らかである。

３．ロシアとの関係

通常、ブリヤート人の主たる居住地は、1689年のネルチンスク条約など露清間の国境画定によってロシア帝国の領土となり、ホリ・ブリヤートとアガ・ブリヤートの居住地もロシア領となったと考えられている。ソビエト時代の研究者は1640年から1689年、あるいは1625年から1689年の間のロシア国家とブリヤート人との関係の歴史をロシアによる侵略過程と見ている［Богданов: 44-66; Кудрявцев: 39-60］。以下、テグルドゥルがロシア

国家によりホリとアガのブリヤートに何がもたらされたと書いたのかを読み取る。

３－１．ツァーリの属民になって物納する

２－３に取り上げた記述に続いて次のような記述がある。

> 大いに尊いツァーリ・アレクセイ・ミハイロヴィチ・チャガン・ハーン[17]sa_a ri Aliqčei Miqayilabisi čaγan qaγanの愛に依って、ネルチンスクNirčiü（ネルシューНэршүү）管区に属し属民となって、ロシアの1648年から、能力のある民を数え出して百六十の矢筒といって、頭ごとに20コペイカ[18]ずつの税を捧げることとなり、安寧に暮らした。[TT: 9-10]

ロシアがシベリアの先住民より取り立てたのは主に高価な毛皮であった［Кудрявцев: 54-59, 134-137］。TTでは、能力があるとして選ばれた者が「百六十の矢筒」と称されたとしている。彼らが矢を用いる狩猟に関わった者だと考えると、狩猟から得られた二十コペイカ相当の物産を納めたのであろう。

ツァーリに受納される形でその属民となり、能力のある者の物納により安寧な生活が可能になったという主張は、２－１にみた、ホリ・ブリヤート人自らロシアの君主の属下に入ったとの含意に近く、収奪的といわれるロシア国家による徴発を直接に批判していないことに注意したい。テグルドゥルは、ロシアと出会ったホリ・ブリヤート人を、進んで物納する自発的属民として描いている。

３－２．ロシア人の狼藉とインペラトル（ロシア皇帝）による牧地の保証

上に続いて、ロシア人との平和的ではない交流の痕跡が書かれている。下にこれを要約する。

ブリヤート人の近くに住むロシア人が、ブリヤート人の土地を奪い取る、自分の畑や牧草地に入ってきたブリヤート人の家畜を捕らえる、妻子を誘拐する、来年の税を支払うまで男児を人質に取るなどの狼藉を働くために困窮したホリのブリヤート人は、代表をモスクワに送り、「大いに尊い主人インペラトルimperator[19]（皇帝）１世ピタルPitar[20]・ハーン」（＝ピョートル一世）に訴えたところ、インペラトルは恩愛によって1703年マルタmarta[21]（３月）の22日に証書と勅令を下し、ロシア人の悪事を禁じた。また、ホリのブリヤート人の占めるべき土地として、セレンゲSelengge、ウダÜde（ウデ Yдэ）、アナAna_a（ア

---

17 「チャガン・ハーン」は「白いハーン」でロシア国家の王を指すモンゴル語。ブリヤート語では「サガーン・ハーンсагаан хаан」と発音する。

18 原文は20 20 mönggü「20 20 銀」。ロシア語訳は по 20 копеек「20コペイカずつ」［БЛ: 8］。

19 император

20 Пётр

21 март

ナーАнаа）、クドゥンQudan（ホダンХудан）、トゥグヌイTüngnü（トゥグネTүгнэ）、クルバKürbi（フルベХүрбэ）、ヒロクKiluqu（ヒョルゴХёлго）の諸河川とモンゴル境界までの無主の地を指定した上で、エラウナYaruuna（ヤローナЯрууна）要塞の管下に移してネルチンスクNirčiüの管理に入るよう命じたのであった［TT: 10］。

ロシアの君主の属民になったとはいえ、テグルドゥルは、ブリヤート人に対するロシア人の狼藉を「適切ではない」ülü ǰokiquとの表現で批判的に描く一方［TT: 10, l. 5］、これをインペラトルが解決したと書くことでその善政を賞賛する内容になっている［TT: 10, ll. 7-8］。ロシア人の驚くべき悪事に目を奪われがちだが、上の記述で重要な意味を持つのは、1703年にインペラトルがホリ・ブリヤート人の居住地を指定し、そこで暮らすことを約束したことである。彼らはインペラトルによってインペラトルの下で暮らすことを保証された属民なのである。

3－3．テグルドゥルの先祖について

続いてテグルドゥルは、自分の先祖と自分自身がロシア帝国下のホリならびにアガのブリヤートの首領として帝国の異民族統治に貢献し、ロシア皇帝の恩情によって出世したことを記している。ここでは特に彼の先祖に関する記述を取り上げる。

ピョートル一世がホリ・ブリヤート人の居住地を定めた後のこととして、下のような記述が続いている。

> ホリのブリヤートたちは狩猟と牧畜などで安んじ喜び、家畜が豊かになって、【人口が】多く増えたのであった。その後、【清朝との国】境の標を置くまでは、モンゴルの地から常にラマたちと庶民が来て、ホリのブリヤートとひとつになったことから、加えてさらに多くなったのであった。［TT: 11］

インペラトルに居住地を定められた後、ホリ・ブリヤート人は狩猟と牧畜などで豊かになった、つまり、彼らの繁栄の礎としてピョートル一世の善政が位置付けられていること、そしてホリ・ブリヤート人が主に狩猟と牧畜に頼って生活していたことが読み取れる。また、清朝との国境が決まる[22]以前には、モンゴルの地からラマや一般の人々が到来し、ホリ・ブリヤートに合流して人口が増えたとも記している。国境画定以前には、モンゴルとホリ・ブリヤートの間では人の往来が盛んであって、モンゴルとホリ・ブリヤートの間は完全に断絶してはいなかったことを示している。

なぜ、テグルドゥルがこのようなモンゴルとホリ・ブリヤートの間の人の往来について記したかというと、下のように、彼の先祖ハバンシ・フンドゥインという人物がモンゴルからやって来た者であったためと思われる。

> この時期にモンゴルの地からハバンシ・フンドゥインQabangsi Kündü-yin（ハバン

22　TT［12-13］では露清の国境画定を1727年とする。

シャ・フンドゥインХабанша Хүндүйн）という一人がやってきて、ホリ諸氏族と一緒になり、バイカル湖近くに住処を定めていると、1705年に大膳職stoolniq[23]にして陸軍大佐polqobniq[24]のピョートル・サッヴィチ・スクリピツィンPiotor Sa_a_biši Skripiičin[25]が土地を検分し牧地を調査するためにお越しになった時、ハバンシはその傍に同道し道案内をし、たくさんの益と行くべき道を示したおかげで、軍司令官boyevoda[26]のゴロヴィンГolovin[27]の添付文書を通じて、大いに尊い方（＝ロシア皇帝）の下さった証書によって税と他の諸義務を軽くされたのであった。（中略）ハバンシの息子はヒタンKitan、彼は東ホワツァイquvačai氏族のザイサンǰayisang（зайсан）であった。ヒタンの息子はダヒDaki・ザイサン。（中略）息子はトバToba。トバの息子はテグルドゥルTegüldür、（後略）［TT : 11］

ハバンシはもとはモンゴルの者で、ホリ諸氏族と合わさりバイカル湖近くに住んだ者であったが、上の２－３で見たホリ人に比べ、ハバンシのホリ合流は後代のことにかかる。彼は、1705年にピョートル・サッヴィチ・スクリピツィンの土地検分に大きな貢献を果たし、それがロシアの君主に認められて優遇された。ハバンシは東ホワツァイ氏族としてホリ諸氏族に合流したらしく、その子孫からはザイサンに就く者が出るほどに栄えた。テグルドゥルはその一族に生まれた者であった。

３－４．伝統的身分秩序への干渉

上に続いては次のような記述がある。

マンジュの康熙帝とロシアの大いに尊い主人インペラトル２世パイタルPayitar（＝ピョートル二世）の時、1727年に、３等文官tayinoi sobiitniq[28]で受勲者であるイリリスキ伯サッヴァ・ヴラディスラヴィチIlliriski γarab Sa_a_bu Valadislavisi[29]が中国の官吏とキャフタKiyaγtu（ヒャーグタХягта）からエルグネÜrgün_e（ウルゲネYргэнэ）川の源流地からホンタイジの地に至るまでロシアと中国の地を分け、境の標を置く時に、ホリのザイサンであるシド・ボルティログンŠidu Boltiruγ-un（ショド・ボルティログイШодо Болтирогой）が、異なった信心を持つ属民たちに駅馬や必要な物事は何でも助けて尽くしたので、主人インペラトル２世ピタルPitar・ハーン（＝ピョートル二世）が1729年イユニiüni[30]（６月）の４日に定めた特許によって、彼ザイサン・シ

23 стольник
24 полковник
25 Пётр Саввич Скрипицын
26 воевода
27 Головин, Фёдор Алексеевич
28 тайны советник
29 граф Илирийский Савва Владиславич
30 июнь

ドがタイシャとなされてから、そのシド・タイシャの兄弟と子供たちは国庫に税を支払わず、彼タイシャ・シドと跡を継いだ子供たちと一緒に毎年のキャフタの収入から二十ルーブル[31]の俸禄を取っていることとされ、恩愛にあずかった。これ以降、ホリのブリヤートの中ではタイシャというノヤンたちが筆頭に立つこととなった。［TT: 12-13］

露清国境を画定した1727年のブーラ条約の時に、ホリのザイサンであったシド・ボルティログンがサッヴァ・ルキチ・ラグジンスキ・ヴラディスラヴィチСавва Лукич Рагузинский-Владиславичをよく助けたため、インペラトル・ピョートル二世より、ザイサンよりも上位のタイシャに据えられたこと、タイシャがホリ・ブリヤートの筆頭となることが定められた、という。ブリヤート人の間にタイシャがいつ現れたかはTTには見えないが、この時代以前のモンゴルではハーンに次ぐ実力者がタイシ（＝タイシャ）を帯びた。モンゴルの伝統的称号タイシャをインペラトルがシドに与えたこと、そしてタイシャをホリ・ブリヤート人の最高の地位と定めたことは、インペラトルがかつてのモンゴルのハーンのようにタイシャ号の授与を掌握し、タイシャより上位のハーンを称する者がホリ・ブリヤート人から現れる可能性を断ったことを意味する[32]。インペラトルは、従来のモンゴル的身分秩序を背景に持つホリ・ブリヤートの身分秩序に介入し、ホリ・ブリヤートの身分秩序をモンゴルから切り離し、インペラトルがホリ・ブリヤートの最高位の者よりも絶対的に上位に立つ君主となったのである。

３－５．インペラトルの軍隊として

上に続いては、インペラトルがホリ・ブリヤート人に軍旗を与えたという記述がある。

1727年に大いに尊い方（＝ロシア皇帝）の決定により、ホリの十一の氏族のブリヤートに十一の軍旗が賜与された。またその後、1837年に大いに尊い主人インペラトル・ニコライNiqolai[33]・ハーン（＝ニコライ一世）から証書付きの十四の軍旗が賜与され、証書の中ではホリのブリヤート人たちを非正規兵ese jiγsaγaγdaγsan čerigと称していた。［TT: 14］

インペラトルがホリ十一氏族に十一の軍旗を与え、後年、ニコライ一世が下した証書ではホリのブリヤート人たちは非正規兵と称された。たとえ非正規兵であるとはいえ、ホリ・ブリヤート人に対してインペラトルが軍の象徴である軍旗を与えたことは、ホリ・ブ

31　原文はtögürig「トゥグリグ」、ロシア語訳はв двадцать рублей「20ルーブル」［БЛ: 10］。和訳はロシア語訳に拠った。

32　モンゴル側の王権論では、チンギス一統に属さない者はハーンを称する資格を持たない。ホリ諸氏族も無資格の範疇に属する。

33　Николай

リヤート人がインペラトルの軍に編成され、帝国の軍事制度に組み込まれたことを意味する。

３－６．インペラトリツァの新税制

次に、エカチェリナ二世の時の税制導入に関する記事を見よう。

> 大いに尊い主人インペラトリツァimperatariiča[34]（女帝）・２世エカチェリナ・アレクセエヴナQateriina Oliqsiyebna[35]の時、1763年にホリのブリヤートの労働者一人あたり銅銭で３ルーブルずつ税を捧げることになった。［TT: 14-15］

３－１では、狩猟によって得られる物を納めたと推測したが、このインペラトリツァ・エカチェリナ二世期のホリ・ブリヤート人に対する税制は、労働者個別に課税し銅銭で納めるとされている。この記述には、単に「労働者」と見えるのみで、狩猟や牧畜などロシアへの貢納品を獲得する方法を特定する文言は見えない。おそらく当時のホリ・ブリヤート人が従事する生産活動が狩猟・牧畜・農耕などに多様化していた上に、乱獲によって毛皮獣が減少したことに加え、貨幣経済が浸透しつつあったことが背景にあるのだろう［Кудрявцев: 134-137; ИБ2: 152-154］。

３－７．インペラトリツァが農業を普及させる

またエカチェリナ二世はホリ・ブリヤート人に農業を勧めた。きっかけは冷害であった。

> 1790年ごろ、冷害が起こり、ホリ・ブリヤートの家畜が被害を受け貧困になって、（中略）1792年に、大いに尊い主人インペラトリツァ２世エカチェリナYi_qateriina[36]・ハトン・ハーンqatun qaγan（女帝）が憐れんで国庫から種と鋤と鎌を売ること無く与え、能力のある人を選り分けて農耕させ増やさせたため、ブリヤート人たちは栄養豊かになり、この後、能力のある者は農耕を行うようになり、家畜を育て家畜によってさらに豊かになって、【人口が】増加し、（後略）［TT: 15］

３－３に見たように、テグルドゥルは、ピョートル一世による居住地保証後のホリ・ブリヤート人が主に狩猟と牧畜によって生活したと書き記した。そしてここでは、冷害で家畜が大きな被害を受けたホリ・ブリヤート人を救うため、インペラトリツァがホリ・ブリヤート人に種子と農具を無料で与え、能力のある者に農業を行わせたので、ブリヤート人は飢餓を脱し、その後には農業と牧畜で豊かになって人口が増えたという。インペラトリツァの救済策はホリ・ブリヤート人の生活を「狩猟と牧畜」から「農業と牧畜」に移行させる契機となった出来事だった。

---

34 императрица

35 Екатерина Алексеевна

36 Екатерина

３－８．ブリヤート人キリスト教徒の出現

十八世紀末のホリ・ブリヤート人の中にはキリスト教徒が存在したらしい。

> ホリ・ブリヤート人たちのある程度の数の者の自発的に十字架を身に着けてキリストqristoos教に入信した人を集めて、ヒロクKiluqu【川？】のトドホトTodqatu（トードホトТоодхото）という所に集落čiliinei[37]を作らせ、160人中に一人の長starsina[38]を決めさせて、1795年に選り分けて居らせた者が1826年に自発的にホリの管轄から分かれて、クナレイQonili（ホナライХуналай）郷[39]の統治に加えられた。［TT: 15］

先行研究[40]によれば、バイカル湖両岸のブリヤート人の地にキリスト教（正教）が組織的に布教されたのは1681年のダウルスカヤ伝道団 Даурская миссия の創立に始まり、1682年にはセレンゲ河畔にトロイツキー修道院 Тройцкий монастырь が建てられ、1667年に清からロシアに投じたエヴェンキ人の一族長ガンチムール[41]がロシア皇帝の勅命により1684年に受洗したことからもわかるように、ブリヤートの地にキリスト教が波及し、そこに住む部族長に受洗者がいた。下の３－11に見るように、十八世紀初にモンゴルより仏教が伝来したことを受けて、1727年にはイルクーツク主教区Иркутская епархия が置かれ、東シベリアでの布教が強化されたが、十八世紀にはブリヤート人受洗者はまだ少なく、1827年のトゥンキンТункин地方のブリヤート人受洗者は約250人であり、十九世紀三十年代末にイルクーツク主教区の求めで宗務院が東シベリアでの布教を強化した。ロシアの行政と聖職者側は「草原の貴族」に頼ろうとノヤン（貴族）の中から「正教の擁護者」を得るための策を講じ、十九世紀四十年代にはホリのタイシャの者ディムブィロフДымбылов（ИБ2: リンチン－ドルジョ・デムビルィンРинчин-Доржо Дэмбилын）が叙勲と官職、賞品と引き換えに受洗したので、政府と宗務院、イルクーツク伝道団は彼が仏教を抑えキリスト教をホリのブリヤート人に広めることを期待した。

ブリヤート人キリスト教徒の出現はロシア人との接触から生じたと推測されるが、TTにその由来は明らかでない[42]。上に引用した部分のブリヤート語テキストを直訳的に読む

37　селение

38　старшин

39　このクナレイと同一地点か定かではないが、伊賀上［2003］やИБ2［107, 192］にセメイスキー（旧教徒старообрядчество）の住むボリショイ・クナレイ村（ИБ2：クナレイ村）の存在が言及されている。クナレイ村が、トロイツキー修道院であろうと思われる「セレンギンスキー修道院Селенгинский монастырь」の農民によって形成され［Кудрявцев：83］、その管轄下にあったことが指摘されているが［ИБ2：104］、この農民がブリヤート人か否かは言及されていない。

40　*Очерки истории культуры Бурятии*［274-276］、ИБ2［181-189］。

41　ガンチムールとその受洗については若松［1973; 1974］参照。

42　伊賀上［2005］は、「洗礼ブリヤート」の住むノヴォスパスク村の歴史や最初の受洗者の記憶を分析している。トドホトからクナレイに移住したブリヤート人キリスト教徒には関係しないが、ブリヤート人キリスト教徒が現れた事例として参考になろう。

と、1795年以前に存在したホリ・ブリヤート人キリスト教徒は「自分の好みによって」öberün dura-bar入信したが、1795年にはトドホトに「集められ」čuγlaγulǰu、集落に「させられ」bolγaǰu「居らされた」bayilγaγsanので、強制的な一連の行為であったように解せられる。そして、1826年には彼らの「自分の好みによって」ホリの管轄を離れクナレイ郷に移り至って、クナレイ郷の統治に「加えられたqamǰiγdabai」というので、移動は自発的、行政的措置は受動的であったと読める。

テグルドゥルが繰り返し「自分の好みによって」という表現を用いていることから、一部のホリ・ブリヤート人のキリスト教への入信とクナレイ郷への移住はロシア帝国側や非キリスト教徒ブリヤート人側の強制ではないことを含意しているように読み取れるが、1795年のトドホトへの移動と集住が強制的であったように表現した理由や背景はよくわからない。1841年に洗礼を受けたトゥンキンの草原議会議員ボルドイ・パルシェノフ Бордой Паршеновが、受洗者すべてをトゥンキンの草原議会の統治から引き離してロシア農民村落に移住させ、それらを自らが統治できるようロシア帝国に認めさせたことがあったが［Кудрявцев : 204-205］、ホリで誰がそのような行為に及んだかは明らかでない[43]。

テグルドゥルは、一部のホリ・ブリヤート人キリスト教徒の分離を遺憾と捉えたのだろうか。それとも、シャマニズムやチベット仏教を信仰する者が多いホリ・ブリヤート人からキリスト教徒が去ったことを好意的に捉えたのだろうか。

３－９．ロシア人入植者とホリ・ブリヤートの分裂

続いて、ザバイカル地方へのロシア人入植者に関する記述がある。この部分にも、テグルドゥルの複雑な感情が反映されているように読み取れる。

> それからホリのブリヤート人が増え、さらに多くなって、その一部は移動を続けてネルチンスク管区のインゴダInggidei（エンギデイЭнгидэй）川と（中略）その近くの他の土地を移動して住牧していると、1796年あたりに、高みにある方（＝ロシア皇帝）の命令で４等文官distabitelnoi statsqoi sobiitniq[44]のラバLaba様がお越しになって、ロシアの地からバイカル湖南方に新たに住まわせる入植者たちに土地が必要になった時に、インゴダ川とウルンガÜlüngge（ウレンゲYлэнгэ）川、トゥラTura川から１万５千デシャチーナdisteyina[45]の土地が与えられて、その後、その土地に入植者

43　かつてセメイスキーの間では穢れ概念が発達し、異教徒や別宗派の者と食器を共にしたり同じ井戸の水を使ったりすることを嫌っていたという［伊賀上2003：74］。また、新受洗者自身が農民や町人身分に登録されて同族の者から離れることを求めたともいう［*Очерки истории культуры Бурятии*: 275］。当時のホリ・ブリヤート人の多数を占めた仏教徒とシャマニズム信者の所から離れる一つの理由として捉えられよう。

44　действительный статский советник

45　десятина. 1デシャチーナ＝1.09ヘクタール。

たちが来て村ができる時に、その土地に移動していたホリのブリヤート人の多くがアガAγu（Ara）川とオノンOnung（Онон）川の畔あたりとその近くの他の土地に移動して行って、その土地に昔からいた人と合わさって住牧するようになったため、ホリのブリヤート人たちは二つの部分に分かれて、ヴェルフネウディンスクDegedü üde（デーデ・ウデДээдэ Yдэ）管区とネルチンスクNirčiü管区に移動していたが、唯一ホリの管轄下にあったのだった。[46]［TT: 15-16］

ロシア皇帝の派遣したラバの策によって、1796年ごろ、バイカル湖南方のホリ・ブリヤート人の住地の一部がロシア人入植者に与えられ、ホリ・ブリヤート人の一部がアガ川方面に移住した結果、ホリとアガのブリヤートに二分したという。このことをテグルドゥルが重く捉えていたことは、TTの後半部分に同件を再度記したことからも確かである［TT: 32-34］[47]。注目されるのは、アガ・ブリヤート人は、「1703年マルタmarta（３月）の22日の証書の通り、主がいないアガ川およびオノン川の畔あたりとその近くの河川で遊牧し住み着いた」［TT: 32］と記していることである。この証書とは、３－２で言及したピョートル一世のものである。テグルドゥルは、これに言及することで、ホリ・ブリヤート人が移ったアガ川一帯がインペラトルによって居住を保証された所であることを証拠立てている。

移住の結果、ホリからの遠隔統治を不便に感じたアガの一部の人々の中に、1824年前後から、ホリの管轄を離れてネルチンスク管区の管轄に移る希望が上がった。これはアガの官吏とホリのタイシャらに嫌われたが［TT: 40］、1835年からそれが具体化し始め［TT: 43］、1839年にアガ草原会議が設置された後の1842年にはアガの筆頭タイシャが任命され、ホリの管轄から離れて独自の統治制度を備えた［TT: 44-45］。

すでに述べたように、テグルドゥルはロシア帝国によってアガ・ブリヤートの筆頭タイシャに任じられたホリ・ブリヤート人である。そのテグルドゥルにとって、アガ地方移住とアガ独自の統治機構設置は正当化を要する過程であるので上のように記したのであろう。一方、元来のホリ・ブリヤートとしての統治の在り方を繰り返して主張するのは、従前の一元的統治を肯定的に捉えているからだろう。

３－10. インペラトルの種痘と仏教医学

続いて、天然痘の治療にインペラトルが有効な対策を講じたことが記されている。

時折、天然痘が発生し、多くの人がその病気で苦しんだり、その病気で若者たちがや

46　ポッペは、ラバの派遣は1802年、土地面積は105,000デシャチーナであると注する［БЛ : 33-34］。

47　クドリャフツェフはホリ・ブリヤート人が故地を追われたことを重大視しているのに対し［Кудрявцев : 93］、ИБ2［123-124］は劣悪な環境のためこのたびのロシア人植民者のうち定着した者が多くなかったことを挙げている。

つれ死んでいたが、1808年の頃、大いに尊い主人インペラトル１世アレクサンドルAliqsandar_a[48]・ハーンが憐れみ、種痘を打つ学習を行わせてホリのブリヤート人の中に十九人の種痘の生徒たちが決められて、後にそれら生徒たちに、人々から給料と税金を無くして、種痘を打つ習慣が現れ続け、上の天然痘は止んで無くなり、（後略）［TT: 16］

天然痘撲滅のため、インペラトル・アレクサンドル一世が種痘技術者を養成させ、その普及と定着が成功した[49]。

一方、十七世紀末から十八世紀前半にザバイカルのブリヤート人の間に伝わったチベット仏教の方面から見た医療に関する内容も記されている。

また宗教が広まり、薬の経の知識を学んだラマたちが病気を治すことと、お経を読み続けて人々が種々の病気によって痛むことや不時の死の恐怖から救われて、今になるまで落ち着いて、さらに【人口が】増えて多くなったため、（後略）［TT : 16］

医僧の治療ならびにラマの誦経による精神的安定と人口増加とを結びつけて、ブリヤート人に対する仏教の貢献を明らかにしている。

次項に見るように、ザバイカルのブリヤート人の間にチベット仏教が伝わったのは十七世紀末から十八世紀前半であった［Кудрявцев: 138; 若松1976: 4-5］。種痘が普及したのが1808年からであるので、チベット仏教とその医学はヨーロッパの医学より百年以上前に広まったという意味で、より伝統ある医療体系であった。テグルドゥルは、新しい先進的なロシア伝来の医学と、それに先んじてザバイカル地方のブリヤート人に広まったチベット仏教の医学面での貢献を記している。

３－11. ロシア帝国による仏教の管理

上に続いてはシャマニズムの実践に関する詳しい記録があるが、ここにはロシアとの関係が確認できないので考察は割愛する。それに続いてテグルドゥルは、1727年の露清国境画定以前の1721年にセレンゲ・ブリヤートのジムバ・アハルダインǰimba Aqaldai-yin（ジャムバ・アハルダインЖамба Ахалдайн）[50]がモンゴルのフレーで仏教を学び、同じくセレンゲ・ブリヤートのチョンゴルČongγul（ソンゴールсонгоол）氏族のダムバダルジャーギーンDamba darǰa_a-giin[51]が1734年からラサで仏教を学んで1741年に帰着したことを記

48　Александр

49　ИБ2［398-399］には、この件を含む防疫施策が取り上げられている。

50　この僧の活動とその意義についてはツィレムピロフ［Цыремпилов: 80-85］に詳しい考察がある。

51　ダルジャー・ジャヤギーンDarǰa_a ǰay_a-giin［TT: 22］、ダムバダルジャー・ジャヤギーンDamba darǰiy_a ǰay_a-giin［Хори1 : 67］とも記される。現代ブリヤート語ではダムバ・ダルジャー・ザヤーグィンДамба-Даржаа Заягын［БТБ1: 20］と書かれる。この僧については若松［1976: 2-4, 6-8; 1980: 125-126］、ツィレムピロフ［Цыремпилов: 80-85］を参照。

す［TT: 21］。そして、その少し前のこととして、モンゴルからチベットとモンゴルのラマ150人がセレンゲとホリのブリヤートの所に到来したことに続けて、

大いに尊い主人（＝ロシア皇帝）のご配慮に、彼らラマたちの名前の名簿を付けて届けたところ、1741年に彼らラマ全員を定数とし義務と税から解き放ち、彼らの中からタングドTangγud（タンガドТангад）氏族のチョルジčorǰi・アグワン・プンツォグAγvang pünčuγ（アグバーン・プンセゲイАгбаан Пүнсэгэй）[52]がセレンゲとホリのラマたちの筆頭ラマaqalaγči blam_aとされた。［TT: 21-22］

のように、ロシア皇帝により、ラマの定数確定と義務免除、筆頭位ラマの指名がなされたことを記す。TTは、ダルジャー・ジャヤギーン（上掲のダムバダルジャーギーン）が1764年に筆頭ラマ・バンディダ・ハンボaqalaγči blam_a bandida qamboに任じられたとするが［TT: 22］、誰がこの最高位のラマを任じたかを記していない。TTに名前の見える高位のラマはすべて何者かによって承認された者であり、ロシア皇帝より免許状を得たとする下のような例がある。

チョルジčorǰi・ダツァンDačang[!][53]・チョイワン・ドルジ・イシ・ジャムツォインčoyivang dorǰi isi ǰamčo-yin（ショボイン－ドルジョ・イェシ－ジャムスィンШобойн-Доржо Еши-Жамсын）は1838年に全東シベリアのチベット仏教徒の筆頭ラマ・バンディダ・ハンボに承認され、また大いに尊い主人インペラトル・ニコライ・ハーン（＝ニコライ一世）により1855年にまた再び免許状を頂いた。［TT: 23］

また、このハンボの継承について、

このハンボ・イシ・ジャムツォインが1859年に入寂してからは、バンディダ・ハンボの職をフルン・ノールのダツァンKöl-ün naγur-un dačang（フレン・ノーライ・ダサンХүлэн нуурай дасан）のシレート・ゲロンsiregetü gelong・チョイジ・ジャルツァン・チョイロブ・ワンシグンČos gyi rgiyalmčan čoyirob vangsig-un（ショイジョ－ジャルサン・シラブ－ヴァンチガイШойжо-Жалсан Шираб-Ванчигай）が今に至るまで引き受けている。この職（＝バンディダ・ハンボ）を引き受けているために、高みにある主人（＝ロシア皇帝）より1860年デカブリdiqabari[54]（12月）の22日に下った勅令もある。［TT: 23］

という記述を見ると、ロシア国家によるブリヤート仏教に対する人事的管理はその頂点にまで及んでおり、テグルドゥルがブリヤート仏教界へのロシア皇帝の関与に重たい意味を見出していることがわかる。

52　アグヴァン・プンツォグについては若松［1980: 124］、ツィレムピロフ［Цыремпилов: 53-58］を参照。

53　ユムスノフは、ダンジンdanǰin［Хори1: 72］と記す。

54　декабрь

3－12. ロシアはホリとアガのブリヤートに何をもたらしたか

テグルドゥルが記すロシアとの関係を整理しよう。

1）狩猟によると思われる物資をロシアの君主に納める属民となった。

2）ロシアによって氏族最高統治者としてのタイシャが指名された。

3）ロシア帝国の軍隊組織に組み入れられた。

4）現物貢納から労働者一人一人の銭納に改められた。

5）農業が推奨され、狩猟と牧畜から農業と牧畜を主とする生業に移行しはじめた。

6）キリスト教徒が現れ、別の地に集住させられた後、自らホリの管轄を離れた。

7）ロシア人入植者に牧地を譲ってホリ・ブリヤートが二つに分かれた。

8）チベット僧による医療とロシア由来の医療が併存するようになった。

9）ロシアによって自らの高位のチベット仏教僧が任じられるようになった。

モンゴルからの危機を逃れてロシアの君主に投じたホリ・ブリヤート人が直面したロシア人の狼藉、飢餓、異教徒問題、牧地削減と氏族分離、伝染病などの困難な事態を、ロシアの君主の善政をもって克服し、ロシア国家に組み込まれその各種制度を受容することでホリとアガのブリヤート人が安寧で発展したことをテグルドゥルは記したのである。

おわりに

以上、TTの前半部のみの分析にとどまったが、ホリ・ブリヤート人の歴史家テグルドゥルが自らの歴史をモンゴルとロシアとの関係の中でどのように捉えて描いたか、その一側面を見ることができたと思う。

ロシアの君主の統治下に入ったホリ（とアガ）のブリヤート人が自らの立場を歴史的に説明しようとする場合に重要な問題は、彼らがモンゴルやそのハーンとは一線を画した存在であることの証明であった。テグルドゥルは、『秘史』に代表されるモンゴル側の古籍にも記録される系譜に、ホリ人が伝承してきた祖先説話を組み合わせて、自分たちがボルテ・チノやチンギスの家系からは離れた者であることと、ホリ人がモンゴルから離れて行った過程が「ホリのブリヤート」を形成したことを描き出した。

一方、「ホリのブリヤート」がロシアの君主の支配下に入った理由は、モンゴルから離れて自らロシアの君主に依って行ったことのみが読み取れる。しかしながら、テグルドゥルの祖先である、モンゴル人出身で後発のホリ人ハバンシについては、ロシアの君主による領土政策に貢献した結果、ロシアの君主に認められてホリ人の有力者になったことが説明されており、モンゴルを離れてロシアの君主に依るという筋は踏まえられている。ロシア国家に加わったホリとアガのブリヤート人は、ロシアの君主の善政のもとで難事を克服し、ホリとアガとに二分されるという氏族の苦い経験をもそのそれぞれに統治の仕組みを与えられて克服し、安寧と発展の道を歩んでいることを主張している。

モンゴルとロシアの狭間に立つブリヤート人歴史家の編んだ史書は、おしなべてこうし

た特徴を帯びているであろうか。テグルドゥルの著したTTが、ブリヤート人を構成する全氏族の歴史ではなく、ホリとそこから分かれたアガの歴史、とりわけ自らが所属する一統に関わる事柄の叙述に過ぎないことを考えると、本稿で述べたことが、広い意味でのブリヤート史書に共通する事柄であるとは思われない。TTの前後に成った史書、そしてモンゴルの史書との比較が求められるので、今後の課題としておきたい。

参考文献

Бадмаева, Л.Б. *Язык бурятских летописей*. Издательство Бурятского научного центра Сибирского отделения Российской академии наук, 2005.

Бадмаева, Л.Б. *Летопись Вандана Юмсунова - памятник письменной культуры бурят XIX в*. Улан-Удэ: Издательство Бурятского научного центра Сибирского отделения Российской академии наук, 2007.

БЛ: *Бурятские летописи*. Улан-Удэ: Бурятский институт общественных наук Сибирское отделение Российская академия наук, 1995.

Богданов, М.Н. *Очерки истории бурят-монгольского народа*. Верхнеудинск: Бурят-монгольское издательство, 1926.

БТБ1: *Буряадай түүхэ бэшэгүүд*. Улаан-Үдэ: Буряадай номой хэблэл, 1992.

БТБ2: *Буряадай түүхэ бэшэгүүд*. 2-дугаар ном. Улаан-Үдэ: Института монголоведения, буддологии и тибетологий Сибирское отделение Российская академия наук, 1998.

ИБ1: *История Бурятии*. Т. I. Улан-Удэ: Издательство Бурятский научный центр Сибирского отделения Российской академии наук, 2011.

ИБ2: *История Бурятии*. Т. II. Улан-Удэ: Издательство Бурятский научный центр Сибирского отделения Российской академии наук, 2011.

Кудрявцев, Ф.А. *История бурят-монгольского народа.* Москва-Ленинград: Издательство Академии наук СССР, 1940.

Очерки истории культуры Бурятии. т.1. Улан-Удэ: Бурятское книжное издательство, 1972.

Оюунтунгалаг Аюушийн. *Монгол улсын буриадууд*. Улаанбаатар［: Урлах эрдэм хэвлэлийн газар］, 2004.

Пучковский, Л.С. *Монгольские, бурят-монгольские и ойратские рукописи и ксилографы Института востоковедения*. Издательство Академии наук СССР, 1957.

Румянцев, Г.Н. “Бурятские летописи как исторический источник.” *Труды Бурятского комплексного научно-исследовательского института Сибирское отделение Академия наук СССР*. Серия востоковедная. Выпуск 3: 3-15. 1960.

——. *Происхождение хоринских Бурят*. Улан-Удэ: Бурятское Книжное Издательство, 1962.

Сазыкин, А.Г. *Каталог монгольских рукописей и ксилографов: Института востоковедения Академии наук СССР,* Том 1, Издательство "Наука" Главная ред. восточной литературы, 1988.

Селенге: *Хроника Убаши Дамби Джалцан Ломбо Цэрэнова 1868 г.* Москва-Ленинград: Издательство

Академии наук СССР, 1936.

TT: Хори1: 5-47.

Хори1: *Хроники Тугултур Тобоева и Вандана Юмсунова*. Москва-Ленинград: Издательство Академии наук СССР, 1935.

Цыдендамбаев, Ц.Б. *Бурятские исторические хроники и родословные, как источники по истории бурят*. Улан-Удэ : Республиканская типография, 2001.

Цыремпилов, Н.В. *Буддизм и империя: бурятская буддийская община в России (XVIII-нач. XX в.)*. Улан-Удэ: Институт монголоведения, буддологии и тибетологии Сибирское отделение Российской академии наук, 2013.

Шагдаров, Л.Д., Л.Б. Бадмаева. *Язык и стиль летописи Д.-Ж. Ломбоцыренова "История селенгинских монголо-бурят"*. Улан-Удэ: Издательство Бурятский научный центр Сибирского отделения Российской академии наук, 2014.

BTS: *Buriyad-un teüken surbulǰi bičig*. Qayilar: Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy_a, 1999.

Rinchen: Rinchen（edited and translated）. *Four Mongolian historical records*.（Śata-piṭaka series; v. 11, Mongol-piṭaka; v. 2.）New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1959.

伊賀上菜穂「体制転換とロシア旧教徒：ブリヤート共和国セメイスキー住民の信仰のゆくえ」、『東北アジア研究』 7 : 71-91、2003年。

――「「洗礼ブリヤート」から「ロシア人」へ―ブリヤート共和国一村落に見る帝政末期正教化政策とその結果―」、『ロシア史研究』76: 118-135、2005年。

『秘史』：村上正二訳注『モンゴル秘史』1-3、東京：平凡社、1970-1976。

宮脇淳子「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」『東洋学報』61-1・2: 108-138、1979年。

森川哲雄『モンゴル年代記』、東京：白帝社、2007年。

吉田金一『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』、東京：近代中国研究センター、1984年。

若松寛「ガンチムールのロシア亡命事件をめぐる清・ロシア交渉（上）」『京都府立大學學術報告. 人文』25: 25-39、1973年

――「ガンチムールのロシア亡命事件をめぐる清・ロシア交渉（下）」『京都府立大學學術報告. 人文』26: 1-12、1974年。

――「ブリャートのラマ教」、『京都府立大學學術報告. 人文』28: 1-15、1976年。

――「ブリヤート仏教史考証」、仏教史学会（編）『仏教の歴史と文化』、122-139頁、京都：同朋舎、1980年。

キーワード　ブリヤート、モンゴル、ロシア、歴史書

〔付記〕本稿は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト北東アジア地域研究による研究成果の一部である。

（INOUE Osamu）